

01/

日蓮正宗
青年僧侶改革同盟

創価学会の 御本尊授与の 正当性について

はじめに

今回の宗門事件で日顕が創価学会に対して、

御本尊を授与しないと言い出し、

御本尊を、信徒を脅かす手段にしてきました。

その卑劣な行為に対し、日蓮正宗改革同盟並びに青年僧侶改革同盟は、

改革同盟に所属する栃木県小山市・浄圓寺に格護されていた

日寛上人御書写の御本尊を授与することを決議し、

創価学会に申し入れをしました。

現在、創価学会が行っている御本尊授与の形式を

宗門が非難することはできません。

なぜなら、かつては、宗門も、本山ではなく東京の末寺ごとに、

それぞれ寺宝である有縁の法主の御本尊を

印刷して信徒に授与していたからです。

戦前・戦後＝品川区の妙光寺は五十五世日布法主、豊島区の法道院は五十六世日応法主、同じく豊島区の常在寺は五十七世日正法主と、有縁の法主の御形木御本尊を印刷して信徒に授与。昭和二十七年＝宗門の「布教会」が日寛上人書写の御形木御本尊に統一することを決定。そして日寛上人の御形木御本尊の授与は昭和四十一年まで続く。

ところが、宗門は創価学会の御本尊授与に対して、

宗門の歴史を無視して、自語相違となる難癖を様々につけています。

そこで、彼らのデマを破折し、所詮は単なる感情論であることを

明らかにするために、このパンフレットを作成することにしました。

1 「許可がない」について

「許可」という権威を失えば宗門自体の存在意義はなくなり、分裂が起こる

本山・理境坊の小川只道しどうのように、宗門の歴史を知る僧侶は、日寛上人御書写の御本尊を「にせものとは言えないが、許可がない」という言い方をします。

結局、彼らが言えることは「許可がない」ということだけです。しかし、創価学会を破門にし、「関係ない団体」と言いだしたのは宗門です。自分たちで「関係がない」と言っておきながら、困ると、やはり関係があると言い出すとは、まるで、駄々をこねる子供のようにです。

それでは、なぜ、宗門は困るのでしょうか。なぜ、「許可」にこだわるのでしょうか。それは、僧侶の権威が失われ、宗門の存在意義さえ、疑われるからです。

ニセ法主に「許可」をもらう必要などない

そもそも自己申告で猊座を盗んだ日顕に、「許可」をもらうなど、盗人に頭を下げるようなものです。

日達法主は亡くなる直前、大奥に、娘婿の東京国立・大宣寺の菅野慈雲と当時の御仲居・光久諦顕を呼ぶように奥番に命じました(名称は当時)。もし、日顕が内々に相承を受けたというなら、当然、その場に呼ばれているはずですが、実際には呼ばれていません。

しかし、日達法主は病院から大奥に向かう前に逝去されました。そのことを日顕は最後のチャンスととらえて、自分が内々に相承を受けたと言い出したのです。

ニセ法主の日顕・日如を用いないことが正しい信心

日興上人の『遺誠置文』に「時の貫首為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事」とあります。

自作自演で法主の座を盗んだだけでなく、信徒の浄財で遊蕩に明け暮れて墮落し、信徒差別の感情から「C作戦」を企てた日顕・日如を用いないということが、正しい信心の姿なのです。

2「本山から下付されていない」について

日達法主の時代は、 豊島区・法道院から御本尊を、直接発送

昭和三十年代に授与されていた日寛上人の御形木御本尊は、東京・池袋の法道院で印刷し、全国の末寺に直接、発送されていました。宗門が言うような、本山での法主の開眼など御形木御本尊については全く行われていなかったのです。それは日達法主の時代まで続きました。日顕の代になり、本山に御本尊を扱う「第三課」という部署が出来ましたが、御本尊の印刷は、外部の印刷会社が行っています。

そして印刷会社が運んで来た御本尊を僧侶が印刷の状態を確認して箱に詰め、各末寺に運送会社を使って発送しています。その際に、「開眼」などの特別な儀式などしていません。これが歴史的事実なのです。

3「開眼していない」について

御本尊は開眼する側であり、 開眼されるものではない

御書の中には、御本尊の開眼については全く述べられていません。なぜなら、大聖人は、

「法華経の題目は一切経の神・一切経の眼目なり」(同一〇六〇頁)

「今末法に入って、眼とは所謂未曾有の大曼荼羅なり、此の御本尊より外には眼目無きなり」(同八四一頁)

と仰せであり、御本尊自体が、仏の眼目であり、魂そのものであるからです。ゆえに、他宗の仏像のような開眼の儀式などは一切、必要ないのです。

宗門は『木絵二像開眼之事』等を引用して、“開眼する前の御本尊は木絵であり、法主の開眼が必要”と躍起になっていますが、この御書は、真言宗が当時行っていた木絵二像(木や画で描かれた仏像)の開眼を痛烈に非難された内容であり、御本尊に開眼が必要などとは、一言も仰せではありません。

そもそも、御本尊が木絵二像であろうはずはなく、「一切経の眼目」である御本尊は、他のものに開眼されるべきものではありません。

さらに、大聖人は『報恩抄』で「天台宗の人人画像木像の開眼の仏事をねらわんがために日本一同に真言宗におちて天台宗は一人もなきなり」と“開眼の仏事”自体を厳に戒められています。

4 「脇書を削除した」について

宗門も脇書を削除

宗門の古刹寺院の中には歴代法主の御形木御本尊を多数、所蔵している寺院がありますが、歴代法主書写の御本尊から御形木御本尊を作る際に、授与者の名前を取る場合があります。そうした先例に基づいて、浄圓寺所蔵の日寛上人御書写の御本尊を御形木御本尊にする際にも、授与者の名前を取っています。

それに対して、日顕らは「御本尊の脇書を取ったのは大謗法」と難癖をつけていましたが、それでは宗門も大謗法となります。なぜなら、平成六年十一月、「天晴」という会社の社員三名が本山の総一坊、総二坊を訪れ、安置された板御本尊計四体の脇書部分の「願主 法華講総講頭 池田大作」という文字を跡形もなく消してしまいました。

また、日顕の息子・阿部信彰が大修寺の住職を務めていた際に、全国の末寺に先駆けて、本堂の板御本尊から名誉会長の文字を削除しました。

この一連の脇書削除によって、脇書が御本尊の本体でないこと、また、脇書きを消しても御本尊の功德には変わりがないことを宗門自らが証明したのです。

5 「一機一縁の御本尊だから功德がない」について

歴代法主書写の御本尊に「一機一縁」はない。 すべて大御本尊を書写したもの

宗門は、創価学会が授与している日寛上人御書写の御本尊は、時の浄圓寺住職に与えられた「一機一縁」の御本尊であるから、それを御形木御本尊

にし、授与者でない人々が拜んでも、功德はないと言っています。しかし、この「一機一縁」理論は、まったくのねつ造です。

本来、大聖人が顕わされた一閻浮提総与の大御本尊以外の御本尊は、特定の門下に与えられたものなので、「一機一縁」の御本尊と称します。すなわち、戒壇御本尊とそれ以外の御本尊の違いを説明するために作られた言葉が「一機一縁」です。

しかし、歴代法主の御本尊は、それが誰に授与されたにせよ、あくまでも戒壇御本尊を書写したものであり、すべて「一切衆生総与」の御本尊となります。

たとえば、日寛上人が浄圓寺住職に与えた御本尊であっても、大御本尊を写したものである限り、誰が拜しても功德は同じです。もし、それを否定するのなら、大御本尊の否定になってしまいます。

6 「変造している」について

出所不明の劣化した写真を使って御本尊を誹謗することこそ、謗法である。

宗門の一部の者たちが、宗門の許可もなく、出所不明の不鮮明な写真を使って御本尊を誹謗しています。撮影した者、場所、日時を明かせないということは、いかがわしい写真だということです。このようなことは、信仰者のすることではありません。

彫った版木で刷った御本尊、板に謹刻した御本尊も筆致が変わる。これもすべて変造になるのか。

そもそも、「御形木御本尊」とは、木を彫って版をつくり、その「版木」で刷った御本尊のことです。木に彫るわけですから、どうしても筆の細かい筆致が変わってしまいます。また、同じように、御本尊を板に謹刻した場合も、筆致を完全に再現することはできません。彼らの言い草では、昔の御形木御本尊も末寺の板御本尊もすべて「変造」になります。宗門はそのことを知っているから、このような変造云々などという難癖は宗門からは出てきません。

日顕が御本尊の 変造を指示していた事実もある

もし、変造云々というのなら、日顕は変造の常連です。事例はたくさんありますが、一部を紹介します。

- 1、ある時に日顕は、板御本尊の彫師に、
自分が書写した御本尊の題目の文字の曲がりを、「そっちで直せ」と指示した。
- 2、福山・正教寺の新築の際、御厨子より御本尊の方が大きくて納まらなかった時、
日顕は赤沢朝陽(元日蓮正宗御用達仏師)に
「御本尊を写真にとって、小さくしろ」と指示し、写真で縮小して再度、謹刻させた。

おわりに

日顕らが、自分たちの許可がなければ、

創価学会員が成仏できないと考えていること、

すなわち、自分たちが衆生の成仏・不成仏を

決定できると思っていること自体が、増上慢の極みです。

日蓮大聖人の仏法は久遠元初より未来永劫にわたる不変不滅の法です。

その仏法を日顕らが恣意的に操れると考えているところに、

すべてを支配しようとする第六天の魔王の特徴が現れています。

正しい信心があれば、そのような魔の本質を見抜いて、

紛動されることはありません。

創価学会が御本尊の 偉大さを証明したことを 認めていた日顕

日顕は法主になった当初、本山の僧侶に次のように語っていました。

「学会の信心はきちと結果がでるんだ。

宗門では七百年間そういうことがなかったんだ」

日蓮正宗七百年間の歴史において、創価学会が初めて、御本尊の偉大さを証明したことを日顕自身が認めていたのです。

唱題も折伏もしてこなかった僧侶たちが、御本尊の功德を論ずることなどできるはずがありません。